

東京外国語大学大学院
ドイツ語学文学研究会
DER KEIM Nr. 42 抜刷
2019年3月発行
ISSN 0285-953X

同幹類義動詞の研究
merk- とその派生語の場合

**Eine Untersuchung von sinnverwandten stammgleichen
Verben:
merk- und dessen Ableitungen**

佐藤 宙洋
Takahiro SATO

DER KEIM
かいむ
第42号

同幹類義動詞の研究 merk- とその派生語の場合

Eine Untersuchung von sinnverwandten stammgleichen Verben:
merk- und dessen Ableitungen

佐藤 宙洋

東京外国語大学大学院博士後期課程

Takahiro SATO

Tokyo University of Foreign Studies, Doctoral Student

Abstract

Im modernen Deutschen gibt es viele stammgleiche Verben, was als Ergebnis eines Prozesses, in dem Wortbedeutungen sich verzweigen, interpretiert wird. Ein gutes Beispiel ist die Gruppe, die aus *merk-* und dessen Ableitungen besteht: *merken*, *abmerken* (selten verwendet), *anmerken*, *aufmerken*, *bemerken* und *vermerken*.

Darunter sind anscheinend formale Konkurrenzen vorhanden, denen man in derselben Sprache theoretisch fast nie begegnet: Erstens bedeuten *merken* und *bemerken* beide ‚x wahrnehmen und verstehen‘. Zweitens haben *merken anPP*, *bemerken anPP*, (*abmerken*) und *anmerken* alle die Bedeutung ‚x an y erkennen‘. Drittens besagen *anmerken* und *bemerken* beide ‚x (zu y) sagen‘.

In diesem Aufsatz wird insbesondere versucht, folgende Fragen zu beantworten: Was sind die Unterschiede zwischen den scheinbaren Konkurrenten? Und wie tragen die Präfixe jeweils zu den Unterschieden bei? Diese Untersuchung ermöglicht eine bessere Beschreibung der Wörter und trägt schließlich auch zur Betrachtung der Beziehung von Form und Bedeutung bei.

Als Ergebnis wird gezeigt, wie sich die Wortbedeutungen bei diesen partiellen Wortfamilien differenziert haben: *merken* und *bemerken* sind durch das Kriterium der Unmittelbarkeit der Wahrnehmung unterscheidbar. Zwischen *merken anPP* und *anmerken* gibt es einen Unterschied, der die Rolle des Dativobjekts betrifft. Bei *anmerken* im Sinne von ‚x (zu y) sagen‘ geht es fast immer um eine kürzere Bemerkung, usw.

1. はじめに

ドイツ語には、語幹を同じくし接頭辞の点でのみ形態的に異なる動詞群が数多く存在する。¹ このことは、基盤動詞の語義が分化していく通時的な過程の結果と解し得るが（例えば、Wegera/Waldenberger. 2012: 253ff.）、なかには語義の類似性が高く、それらの分化状況が一見したところ不明瞭なものがある。²

本稿では、そうした事例の1つとして、merk- を語幹とする動詞群を取り上げる（以下 merken 群と呼ぶ）。具体的には、主に Mater (1967: 46) に依拠し、merken, abmerken, anmerken, aufmerken, bemerken, vermerken を考察対象とする。³ その際に立てられる問いは (1) の通りである。

(1) 個々の動詞には、どのような語義が認められ、類似した語義を持つ語は、どのように使い分けられているのか。また、その際造語論的にどのような動機付けがあるのか。

merken 群それぞれの語義・意味用法、および派生の仕組みは、多かれ少なかれすでに記述されているが、それらが全体としてどのように分化しているかに関しては、まだ十分解明されているわけではない。特に、〈(何かに) 気づく〉という語義における merken と bemerken の違い、〈(何かから何かを) 感じ取る〉という語義の anmerken と、類似の表現である、an ~ merken (an ~ bemerken) の違い、⁴ それから、〈述べる〉という語義における anmerken と bemerken の違いに関して研究の余地がある。

したがって本稿は、それらの差異を示し、merken 群の体系を提示することを目指す。⁵ その過程で、従来よりもきめ細かい各語（義）の記述、ならびに派生の仕組みの記述ができることよい。

¹ 本稿では、「接頭辞」という用語を広い意味で、つまり、いわゆる非分離前綴のみではなく分離前綴も指して用いる。また、「派生」という用語も、非分離前綴の付与による造語のみならず、分離前綴の付与によるものも指して用いる。

² 語の内在的な意味を「語義」と呼び、「〈〉」によって提示する。また、語義の使用における具体的な表れを「意味用法」と呼ぶ場合もある。

³ Mater (1967: 46) では、merk- からの派生動詞として他にも vormerken (「予め記入しておく」「仮登記する」) が挙げられているが、本研究では、vor- 派生の仕組みに透明性が高く、意味用法・語義の把握が容易なこと、および紙幅の制限に鑑み、この語を取り上げない。また、merken と bemerken に関して筆者は、両語の語義・意味用法の違いを主題に一度論じたことがあるが（佐藤 2018）、今回は再考を加えつつ、merk- からの動詞派生全体の中で捉え直すことを目指したい。

⁴ 本稿では、例えば「対格目的語（ないし補文）+ an + 与格名詞（ないし daran）merken」を「an ~ merken」「anPP merken」と略記する。

論の構成は以下の通りである。2章では、merken をはじめとする個々の語に関して、その語義を実現頻度も含めて記述・確認する。3章では、ある語義を競合して実現しているように見える複数の語を比較考察する。4章では、総括を行う。考察は、コーパス調査を中心に、各種辞書類と造語論の文献を参照しながら進める。

2. 個別の考察

ある語に対しどのような語義をいくつ認めるかという問題には、語義をどのレベルで捉えるかに応じて異なった解答があり得るが(山田2017: 303ff.)、本章では、主として結合価の違いと想定される派生の仕組みの違いに応じて多義を認めることにする(その上で次章では、弁別の必要に合わせて、より具体的に記述する)。なお、語義の記述には日常的な日本語を用いる。⁶

2.1. merken

2.1.1. 語義の抽出

merken は、他動詞用法で実現する〈気づく〉(何かを意識的に知覚し理解する)という語義、もしくは基本的に再帰代名詞も伴って実現する〈記憶する〉という語義で用いられるのが一般的である。

COSMAS II の W-öffentlich – alle öffentlichen Korpora des Archivs W (mit Neuakquisitionen) (以下単に「コーパス」と呼ぶ)で200例無作為抽出し分析した結果(検索日: 2017年7月3日; ヒット数: 33万2142件)、前者の意味用法は(2)をはじめとし156例、後者の意味用法は(3)をはじめとし17例確認された(残り27例は、anmerken などの対象外のデータ)。⁷

⁵ 本稿の企図する「同幹類義動詞研究」は、Latzel (1995) によって明示的・自覚的に始められたものである。Latzel (1995) は、ändern – abändern – umändern – verändern を筆頭に30グループの語幹を同じくする類義動詞群の意味用法の異同を実証的に明らかにしている(ただし本稿が取り上げる merken 群は扱っていない)。同幹類義語研究を定義するならば、ある語家族(Wortfamilie)に成立する語場(Wortfeld)の研究ということになる。語家族と語場の「絡み合い」については、Schlaefter (2009: 43)でも言及されているが、同幹類義語研究は、その実態解明の具体的な試みと言える。

⁶ この点に関しても、厳密性をめぐって異なる立場があり得る。しかし本稿の目的の範囲内では、日常的な日本語による語義記述が最適と考える。

⁷ 判断の困難な例もあったので数字は多少流動的である。より詳しい分析結果は佐藤(2018)に掲載。また、以下では簡潔さのために、例えば「(3)をはじめとし17例確認された」を「17例確認された(3)」ないし「17例(3)確認された」というように表記する。

(2) Im Jurastudium **merkte** er, dass das nicht sein Weg war. (Süddeutsche Zeitung, 15.09.2012) 法学を学ぶ中で彼は、これが自分の道ではないことに気づいた。⁸

(3) Ich **merke** mir immer was ich im Vorjahr geschenkt habe, um dann im nachfolgenden Jahr etwas anderes zu kaufen. (Burgenländische Volkszeitung, 28.11.2013) 私は前年に何を贈ったかいつも覚えています。次の年に何か別のものを買えるように。

〈気づく〉という語義の merken は、「判断・認識のための手がかり」(岩崎／小野寺1969: 28)を表すと解される an 前置詞句と共に起し得ることが知られている。収集した156例中では、そうした用例は4件確認された(4)。an ~ merken は後述の anmerken 等と競合している可能性がある。

(4) Heidenreich äußerte sich zwiespältig zu ihrer Spitzenposition: „Es freut mich, weil ich daran **merke**, dass ich wahrhaftig bin. Und es betrübt mich, weil ich letztlich nur ehrlich, normal und gerade bin. Wenn das schon das Besondere ist – wie krank sind wir dann eigentlich?“ (Süddeutsche Zeitung, 20.05.2008) Heidenreich は、自身の指導的な地位 [ある雑誌のランキングで、影響力のあるドイツの知識人1位に選ばれたこと] に対し、相反する意見を述べた。「私は喜んでいますが。なぜなら、それに拠って自分には真実味があると気づく [分かる] からです。他方で悲しんでいます。なぜなら、自分は結局のところ正直で普通で率直であるだけだからです。それだけで特別なことだなんて – だとしたら私たちはなんて病んでいるのでしょうか?」

2.1.2. 造語論から見て

merken は、通時的には名詞からの派生と言える。Duden 7 (2014: 557)によれば、merken は、「印・記号」という意味のゲルマン語の名詞 *marka-に遡り、当初は「印・記号を付ける、見分けられるようにすること (mit Zeichen versehen, kenntlich machen)」を意味し、その後「見分けられるようにしたものに注意する、注意を払うこと (das kenntlich Gemachte beachten, Acht geben)」を意味するようになった。

⁸ 引用に際しては筆者による訳を付す。以下同様。

では、今日のドイツ語における merken は、共時的に例えば Merk といった名詞から導けるのだろうか。本稿は、そうすることは難しいと考える。なぜなら、Merk は現代ドイツ語の辞典では見出し語として挙げられないことが多く (Duden 2014; Wahrig 2011 など)、辛うじて記載がある国松編 (1999: 1521) でも、今日稀との表記が付されているからである。したがって本稿では以下、基本的に Merk といった名詞からの派生は考慮しないこととする。

2.2. abmerken

2.2.1. 語義の抽出

abmerken は、「雅語」(国松他編1999: 29) あるいは「古典作家の語彙 (Klassikerwortschatz)」(Duden 2014: 110) とされる、今日では使用頻度の非常に低い語である。DWDS (最終アクセス: 2018年7月17日) でも、⁹7段階中最も低い頻度に位置づけられている。

Duden (2014: 110) は、abmerken を一部 anmerken という言い換えを用いて記述している。このことから、abmerken においても〈感じ取る〉といった語義が実現している可能性が高いと言える。¹⁰

コーパスで検索すると (2018年7月1日)、abmerken のヒット数は1153件であったが、200例無作為抽出して分析したところ、有効データは次の2例のみであった。

- (5) Wenn man jetzt kommt mit der geometrischen Zeit der Griechen (so 800, 700 v.C.), dann haben etwaige Ähnlichkeiten, die man freilich genug **abmerken** kann, mit dieser Kunstströmung wenig zu schaffen. (Wikipedia, 2011) ギリシア人の幾何学時代 (紀元前800年か700年ごろ) を今持ち出しても、あり得るであろう類似性は、その類似性はもちろん十分感じ取れるのだが、この芸術潮流とはあまり関わり合いがない。
- (6) Derjenige, der sich selbst zum Objekt seiner Erzählung macht, muss so über seinem Gegenstand stehen, dass ihm nicht **abzumerken**

⁹ <https://www.dwds.de> (以下同URLは省略)

¹⁰ 国松他編 (1999: 29) では、abmerken に「…に…を看取る、見て取る」という語釈を与えている。この語釈からは、abmerken は「視覚による気づき」のみを表すという見解が読み取れる。しかし筆者は abmerken が、例えば merken がそうであるように、他の感覚による気づきを表す可能性を考慮する必要があると考え、この見解に与しない。Harm (2000) の言い方に倣えば、abmerken も「様相の不特定な知覚動詞 (die modalitätsunspezifischen Wahrnehmungsverben)」の一種と考えられる。

ist, wie es sich bei allem, was gesagt wird, nur immer um ihn selbst handelt. (Süddeutsche Zeitung, 13.10.1999) 自分のことを自分の物語の題材にする人 [自伝を書く人] は、語られることのすべてにおいて自分自身だけが問題であることが感じ取れないほどに、その対象を超越していなくてはならない。

上記の2例に鑑みても、abmerkenには〈感じ取る〉という語義がやはり認められる。付け加えることがあるとすれば、abmerkenは(6)においては与格目的語と補文を伴っているが、(5)においては対格目的語のみを伴っている点である。この点は、abmerkenと後述のanmerkenの用法の違いとなる可能性がある。

ところで、例えばDuden(2014: 110)は、abmerkenに対し〈感じ取る〉という当該語義以外に、〈観察し、眺めつつ(誰かから)学び取る (beobachtend, zusehend (von jmdm.) lernen, ablernen)〉という語義も挙げている。¹¹しかし、この語義の必要性については議論の余地がある。というのも、Eberhard(1982 [1910]: 37)による「自らも芸術家ではない人は、例えばある画家の技巧をabsehenもしくはabmerkenできるが、ablernenすることはできない」という指摘もあるからである。この指摘が今日でも正しいとすれば、abmerkenはあくまで〈感じ取る〉ことを表し、〈学び取る〉(つまり、できるようになる)ことまでは表さないことになる。よって、この語義に関しては態度を保留し、以下では取り上げないこととする。

2.2.2. 造語論から見て

abmerkenと共起し得る与格目的語は、理論的には元来abに対応するvonの目的語と考えられる((jm.) et. abmerken < von jm. et. merken)。したがって、abmerkenは、von前置詞の「抱合 (Inkorporation)」(例えばFleischer/Barz 2012: 378)と、それに伴う項の明示的な継承あるいは非明示化によって形成されていることになる。

¹¹ Duden(2014: 110)では、正確にはどちらも「下位語義」として示されているが、上位の語義が示されていないこともあり、ここでは単に「語義」という言い方にする。

2.3. anmerken

2.3.1 語義の抽出

anmerken に関する辞書記述には、内容の面で細かい異同が見られるので、ここでは先に実例分析の結果を述べ、適宜辞書記述にも言及しながら考察を進める。

コーパスで anmerken を検索すると（2018年6月25日）、16万6847件ヒットするが、その中からこれまでと同様に200例無作為抽出して分析したところ、有効なデータは174件収集できた。

この174例を観察したところ、anmerken には〈感じ取る〉〈述べる〉という2つの語義が確認できた。どの語義で用いられているか明瞭でないケースもあったが、いずれかに割り振れるものとし集計するならば、〈感じ取る〉という語義は、基本的に与格目的語と対格目的語・補文を伴って64例で（7）、〈述べる〉という語義は、基本的に対格目的語・補文を伴って110例（8）で実現していることになる。

(7) Es ist schon erstaunlich, dass man den Gedichten nicht **anmerkt**, dass sie über 150 Jahre alt sind. (Nordkurier, 27.10.2005) この詩に150年以上の年月を感じられないことからして大変な驚きです。

(8) Es kommt auf einen kleinen, aber entscheidenden Unterschied an, wie der Arzt Paracelsus vor 500 Jahren **anmerkte**: „Nur die Dosis bewirkt, dass ein Ding kein Gift ist.“ (Mannheimer Morgen, 26.04.2003) 500年前に医師パラケルススが述べたように、重要なのは小さな、しかし決定的な違いである。曰く、「あるものが毒ではないのは、ただその分量による。」

今回の分析データには含まれていなかったが、anmerkenには〈印をつける〉という語義が認められる可能性もある (Duden 2014: 182; 国松他編1999: 134; einen Tag im Kalender [rot] anmerken 「カレンダーのある日付に [赤く] 印をつける」)。¹² いずれにせよ、実現頻度は稀と言えるので、本稿では以下この語義を考慮しない。

2.3.2. 造語論から見て

第1に、〈感じ取る〉という語義において、anmerken の an は、「判断・認識のための手がかり」を表す前置詞 an に由来し、anmerken の与格目的語は、

前置詞 an の目的語に当たると見なせる。つまり an jm./etw. etw. merken から前置詞の抱合によって形成されたのが jm./etw. etw. anmerken と考えられる。

第2に、〈述べる〉という語義ではどうか。この語義に関しては、merken と an に分解して説明するのは難しいように思われる（Merk からの派生は、先述のように本稿では考慮していない）。〈述べる〉という語義を導くために、merken の〈気づく〉という語義、もしくは〈記憶する〉という語義のどちらを想定するにしても、他方の an に適切な意味機能を想定することができない。¹³

2.4. aufmerken

2.4.1. 語義の抽出

aufmerken も、今日では使用頻度の低い、「高尚 (gehoben)」（例えば Duden 2014: 237）ないし「雅語」（国松他編1999: 205）とされる語である。なお、DWDS（最終アクセス：2018年7月21日）の頻度表示だと、7段階中低いほうから2番目の評価である。

aufmerken をコーパスで検索したところ、ヒット数自体は2万3628件であったが、200例無作為抽出し分析してみると、有効なデータは10例となった。そして、その10例すべてにおいて、aufmerken は自動詞として、〈注意を払う〉という語義で用いられていることが確認された（10）。

(10) Als drei Patienten in kurzer Zeit hintereinander starben, haben einige seiner Kollegen **aufgemerkt** und eine Untersuchung verlangt. (Meßkirch, 14.04.2011) 3名の患者が立て続けに死亡した時、彼の同僚のうち何人かが注意を払い、調査を要求した。

各種の辞書記述に鑑みると、注意を向ける対象は auf 前置詞句、もしくは与格名詞句で表示可能のようだが、10例中に当該句との共起は確認できなかった。Duden 8（1964: 82）で指摘されているように、aufmerken は対象表示を伴わないで用いられる頻度の方が高いと言える。

¹² 〈述べる〉と〈印をつける〉をあえて区別せずに〈注釈する〉といった語義を認めることも可能ではあろう。

¹³ anmerken の〈述べる〉という語義が、同語の〈感じ取る〉という語義から派生している可能性も考慮する必要があるかもしれないが、ここでは割愛する。後述の bemerken により明瞭に指摘できるように、「気づく」ないし「感じ取る」と「述べる」ことの間には密接な関係がある。

ところで、国松他編（1999: 205）では、aufmerken に対し、aufzeichnen と類義の「（備忘のため）書きしるす〈とどめる〉」という語義ないし意味用法を認めているが、本稿はこれを考慮しない。こうした用法あるいは語義は、今回のコーパス調査では見られなかったこと、ならびに多くの辞書（例えば Duden 2014: 237; Wahrig 2011: 188）で記載されていないことに鑑み、実現頻度が非常に低いと言えるからである。

あわせて、国松他編（同上）や Duden（同上）が、aufmerken の語義を、aufpassen と類義の〈注意を払う〉という語義と、aufhorchen と類義の〈突然注意を払う〉という語義に分けている点にもふれておく。¹⁴ 本稿としては、現時点で十分な例の収集・分析ができていないで、この問題に関しては判断を保留したい。後述するように造語論的に見れば、後者の語義が認められる可能性が十分あるのだが、DWDS（最終アクセス：2018年7月22日）のように、後者の語義を立てていないものもある。

2.4.2. 造語論から見て

aufmerken における auf は、方向を表す前置詞由来と解される。つまり aufmerken は、「古風 (veraltend)」(Duden 2014: 1358) ないし「稀」(国松他編1999: 1522) と言われる auf jn./etw. merken という用法を基盤に派生していると考えられる。その際、auf の目的語は非明示化（別の言い方をすれば、存在量化）されていることになる。Kühnhold (1973: 188) では、目的語の非明示化を伴う auf 派生の例として、aufprallen, aufplumpsen, aufspringen, aufstampfen, aufstoßen, auftreffen の記載がある。

また、仮に国松他編（1999: 205）や Duden（2014: 237）のように、aufmerken に対し〈突然注意する〉という語義を認めるならば、当該の auf は「突然の開始」という意味を付与していることになる（Kühnhold 1973: 282f. ; Motsch 2004: 112f.）。

2.5. bemerken

2.5.1. 語義の抽出

bemerken は、対格目的語・補文を伴って、〈気づく〉という語義、もしくは〈述べる〉という語義で用いられる。コーパスで検索し（2017年7月3日）25

¹⁴ aufhorchen に〈突然注意を払う〉という語義を認めることの適切性も問われ得るが、ここでは割愛する。

万914件ヒットした中から、200例無作為抽出し分析した結果、前者の用例は135件（11）（12）、後者の用例は62件（13）確認された（残り3例は対象外の事例）。¹⁵

(11) Irgendwann hatte ich mich ausgeschrien und **bemerkt**, dass ich die laute Musik nicht mehr brauche. (Falter, 24.08.2011) いつの何か私は叫び疲れ、もう大音量の音楽 [ロック] を必要としないことに気づいていた。

(12) Die Beamten hatten den Fahrer **bemerkt**, weil er mit hoher Geschwindigkeit fuhr. (Nordkurier, 01.07.2013) 警察官たちは、そのドライパーに気づいた。なぜなら、彼は高速度で走っていたからだ。

(13) „Ich habe deinen Hund gesehen, der ist ziemlich klein“, **bemerkte** sie. (Hamburger Morgenpost, 30.06.2012) 「君の飼っている犬を見たよ。かなり小さいね」と彼女は述べた。

収集データには含まれていなかったが、bemerken は、先述の merken と同様、an 前置詞句と共起し得ることが知られている（例文の紹介は3.2. に譲る）。

2.5.2. 造語論から見て

〈気づく〉という語義の *bemerken* の *be-* を造語論的に考察するためには、基盤語と考えられる *merken* との比較に基づき、*bemerken* の意味的・統語的な特徴をまず解明しておく必要がある。この点に関する詳しい論述は3.1に譲るが、結論だけ述べれば、*bemerken* の特徴は、記号を介さないという意味で直接的な知覚を表しうる点にある。

上記の特徴は、*be-* による派生に広く認められるものとは言えない。したがって、*bemerken* の *be-* には、何らかの意味機能を認める必要が（あまり）ないとも考えられる。また他方で、何らかの意味機能が認められる可能性もある。

¹⁶ この点に関しては本稿では態度を保留したい。

次に、〈述べる〉という語義の *bemerken* における *be-* はどうか。この語義に関しても、*anmerken* の場合と同様に、少なくとも共時的には、構成的な説

¹⁵ ただし、実際にはどちらの語義か判断の難しいケースもあったので、数字は多少変動する可能性がある。より詳しい分析結果は佐藤（2018）に掲載。

¹⁶ 佐藤（2018）では、*bemerken* に本稿とは異なる意味的・統語的特徴を認め、それらは *beobachten* をはじめとする「観察」や「吟味」を表す *be-* を持つ知覚動詞との類推関係を *bemerken* に想定することで初めて統一的に説明可能であると考え、この *be-* に「*beobachten* 等とのさらなる意味的・統語的共通性を類推することへ形態的に貢献する機能」を想定した。

明は難しい。¹⁷

2.6. vermerken

2.6.1. 語義の抽出

コーパスで *vermerken* を検索したところ (2018年7月25日), ヒット数は6万1664件であったが, そこから200例無作為抽出して分析した結果, 有効なデータは179例収集できた。

vermerken には大方の辞書で2種類の語義が認められているが, その語釈には細かい異同がある。¹⁸ そのなかで本稿は, *vermerken* に〈書き留める (*notieren*)〉という語義と, 〈〜と受け取る (*zur Kenntnis nehmen*)〉という語義を立てる Duden (2014: 2168) の見解を支持する。

分析対象の179例中, 〈書き留める〉という語義と判断されたのは159例 (14), 〈〜と受け取る〉という語義と判断されたのは15例であった (15)。また残りの5例に関しては, 与えられた文脈からは語義を一義的に判断できなかった。

(14) Der Urlauber habe offenbar die Geheimnummer auf der Karte oder einem beigefügten Zettel **vermerkt**. (Mannheimer Morgen, 31.07.2002) その休暇中の男性は, 暗証番号をカードか, カードに添付されたメモに書き留めていたようだ。

(15) Bei Auslandsreisen und Urlaubsaufenthalten in seinem Geltungsbereich gewinnt der Euro deutlich an Sympathie. Auch der bessere Preisvergleich innerhalb Europas wird positiv **vermerkt**. (Wikipedia, 2011) 外国を旅行したり, 休暇滞在したりする際にも, その使用可能範囲ゆえに, ユーロは明らかに好感度を増している。ヨーロッパ内で

¹⁷ *bemerken* の〈述べる〉という語義は, 同語の〈注意する〉という語義から派生している可能性もある。何かを知覚・意識することと, それについて表出することは, 事柄として密接な関係にあると言える。例えば Ryle (2009 [1949] : 220) は, „Now when we say that a person is conscious of something, part of what we normally mean is that he is ready to avow or report it without research or special tuition.“ と述べている。加えて, 実例の観察からは, そもそも両語義が *bemerken* において常に判然と分かつたわけではないように思われる。

¹⁸ 例えば国松他編 (1999: 2528) は, *vermerken* に「1. 書き留める, メモする」, 「2. しっかりと記憶にとどめる」という2語義を認めている。第1義は適切と言えるが, 第2義には疑問の余地がある。少なくとも今回の収集データからは, 当該語義を認める必要性は感じられなかった。また, 同箇所であげられている例文に拠れば, (15) のような用例も, この第2義の実現ということになるが, そう捉えるのはあまり自然とは言えないのではないか。

の価格比較が上手くできることも、ポジティブに受け取られている。

2.6.2. 造語論から見て

第1に、〈書き留める〉という語義の *vermerken* は、他の *ver-* 派生の趨勢に鑑みるならば、名詞派生とも考えられる (*verzeichnen* や *verbuchen* と同種の *ver-*)¹⁹ が、本稿は *Merk* からの派生を考慮していない。

第2に、〈～と受け取る〉という語義の *vermerken* に対しては、構成的な説明はできないように思われる。¹⁹

2.7. 章末のまとめ

merken 群における語義の分化状況を表1に示し、本章のまとめとする。²⁰

語義	<i>merken</i>	<i>abm.</i>	<i>anm.</i>	<i>aufm.</i>	<i>bem.</i>	<i>verm.</i>
気づく	○	/	/	/	○	/
感じ取る	/	○*	○	/	/	/
述べる	/	/	○	/	○	/
注意を払う	/	/	/	○	/	/
記憶する	○	/	/	/	/	/
書き留める	/	/	/	/	/	○
～と受け取る	/	/	/	/	/	○

表1：*merken* とその派生語における語義の分布。「○」は組み合わせが確認できたことを、斜線は組み合わせが確認できなかったことを、「*」は有標な使用域にあることを表す。

3. 比較による考察

今度は類義表現間の比較を行う。表1を横に見ると、〈気づく〉と〈述べる〉の2語義において、複数の実現形式が競合しているように見える。加えて、表には示せないが、〈気づく〉という語義の *merken* や *bemerken* は、特定の *an* 前置詞句と共起する用法において、〈感じ取る〉という語義の *anmerken* と競

¹⁹ 〈書き留める〉という語義からの派生である可能性の方が高いかもしれない。そのことは例えば、次のような文例から示唆されるように思われる。この文は、文脈および(15)のような用例の存在に鑑みると、例えば *Positiv wird vermerkt, ...* と書き換え可能と予想される。*Auf der positiven Seite wird vermerkt, Österreich habe in den vergangenen Jahren etwa den Schulbesuch für Minderheiten erleichtert.* (*Die Presse*, 30.08.2000)

²⁰ 造語論的な考察に関しては、未解明の点が多いことと紙幅の制約により省略する。

合している可能性がある。

本章の考察によって、当該語群における語義・意味用法のより精緻な分化状況が明らかになる。なお、abmerken は特殊な使用域の語なので、本章では以下考察対象から外す。²¹

3.1. 〈気づく〉 merken と bemerken

両語の違いとしては、記号を介さないという意味で直接的な知覚を表しうるか否かが挙げられる。²² ここでいう「記号 (Zeichen)」とは、C. S. パースの記号論における、アイコン (Abbild), インデックス (Anzeichen), シンボル (Symbol) の上位概念としての記号である (Jakobson 1965: 80f.)。

merken は、Eberhard (1982 [1910]: 667f.) が指摘しているように (16)、何らかの記号を介するという意味で「間接的な知覚」を表す。²³

(16) „Wir *merken* etwas schon, wenn uns auch sein Anblick noch verborgen ist und es sich nur durch gewisse Kennzeichen und Spuren verrät, aus welchen wir sein Dasein schließen. So *merkt* der Jäger aus bestimmten Zeichen die Nähe des Wildes, man *merkt* aus dem aufsteigenden Rauche ein Feuer, auch wenn man das Feuer selbst noch nicht *wahrnimmt* usw.“ (Eberhard 1982 [1910]: 667f.) 私たちは

²¹ abmerken の意味用法ないし語義は、当該語義における anmerken のそれと非常に類似している。両者の間に意味的な差異があるとすれば、それは例えば、後者と共起する与格項が「判断・認識のための手がかり」であるのに対し、前者のそれが「出所」と解されることと相関する何らかの差異と予測される。しかし、この予測の検証には至っておらず、両語に意味的な差異があるのか否か、現時点では明言できない。とはいえ、仮にそれがあるにしても、非常に微妙な差異であろうと言える。現時点では、anmerken と abmerken を区別するのはむしろ使用域の差である、と考えている。

²² 佐藤 (2018) では、主として反例が見られないという理由で Dewell (2015: 81) を支持し、bemerken は「意図的な注意」を表し、さらにこれは意味論的な前提であるという結論に至った。確かに、例えば後述の (18) でも、bemerken は「意図的な注意」を表しているように見える (「注意深い従業員」)。しかし、この説の決定的な論拠は未だ見いだせていない。逆に、「意図的な注意」説に不利な観察としては、bemerken が意図的な動詞のみを支配すると考えられる versuchen と肯定文で共起し難いことが挙げられる。実際にあるインフォーマントは、Sie versuchte ihn unter der Menge zu bemerken という文の容認性に疑問を呈している。また、コーパスで検索しても (検索日: 2017年9月20日, 検索式: &versuchen /+s0 zu bemerken, ヒット数: 40), versuchen が bemerken を支配する肯定文は検出されなかった。

²³ なお Duden (2014: 1358) における merken の当該語義記述からも merken の間接性が読み取れる: (etw, was nicht ohne Weiteres erkennbar ist) durch Sinneswahrnehmung u. Beobachtung od. durch Eingebung, ahnendes Gefühl erkennen, bemerken, spüren

何かに、その姿がまだ隠れていて、その存在が察せられるような何らかの記号や痕跡によってしか、それが明かされていないうちに、気づく。たとえば狩人は、何らかの記号から獣が近くにいることに気づき、人は、立ち上る煙から火に、たとえ火自体はまだ知覚していなくても、気づく等。

例えば、先述の (2) でも、dass 文で表される内容（「法学が自分の道ではないこと」）を、知覚主体は直接知覚したのではなく、何らかの記号を介して気づいたと考えられる。(2) では表示がないが、おそらくは意欲の欠如、成績不振などによって気づいたものと推察される。

他方で、ある種の前置詞句、典型的には an 前置詞句を伴う用法では、そうした記号がそれによって表示されていることになる。²⁴ 例えば、先述の (4) では、dass 文で表される内容（「自分には真実味があること」）を、あるランキングでの1位という順位を介して（*daran = an ihrer Spitzenposition*）主体が気づく、ということになる。このような解釈は、an ~ merken の先述の4例のみならず、コーパスで追加収集し検出された12例のデータにもすべて当てはまる（後出の例文 (23) (24) を参照されたい）。²⁵

直接的に知覚される対象が merken の対格目的語となり難しいもの（例えば Dewell 2015: 79f.）、merken が間接的な知覚を表すとすれば説明がつく。²⁶ merken は、an 前置詞句で表示され得る記号を介して間接的に知覚される対象だけを対格目的語として伴う。

それに対し *bemerken* は、merken と同様に間接的な知覚を表すこともあるが、そうではない直接的な知覚も表す。つまり *bemerken* はこの点に関して未指定である。

まず、*bemerken* が記号を介する間接的な知覚を表しうることは、例えば an 前置詞句と共起する事例に着目することで示すことができる。先述の *bemerken* の分析データには、*bemerken* が当該の an 前置詞句と共起する例が見られなかったので、ここではコーパスで追加収集し検出された11例から1例

²⁴ (16) では、aus 前置詞句が用いられているが、辞書記述・実例分析に依拠すると an 前置詞句の方が典型的と言える。

²⁵ 検索式：「&merken /s0 an」、検索日：2019年1月15日、ヒット数：9万3102件。その中から200例無作為抽出した結果。

²⁶ ただし、merken が記号を介さない直接的な知覚を全く表さないかは、まだ分からない。この点に関しては、直接知覚の wie 文との共起をさらに観察する必要がある。佐藤 (2018) でも述べたように、merken と直接知覚の wie 文の共起頻度は、bemerken との場合と比べて低く、稀と言えるが、全く共起しないわけではない。

を引く (18)。²⁷ (18) では, dass 文で表される内容 (男が飲酒しているらしいこと) を, an 前置詞句で表されている「酒臭さ」を介して主体が気づいたことが表されている。

(18) Als ein Autofahrer am Mittwochabend seine Spritrechnung in einer Tankstelle in Querum bezahlen wollte, **bemerkte** der aufmerksame Mitarbeiter der Zapfstelle an einer Alkoholfahne des Kunden, dass der 48-Jährige offensichtlich noch mehr „getankt“ hatte. (Braunschweiger Zeitung, 30.05.2008) あるドライバーが Querum のある給油所でガソリン代を払おうとしたとき, その注意深い従業員が客の男の酒臭さから, その48歳の男が別の意味でも「給油」しているらしいことに気づいた。

なお, an 前置詞句と共起しない場合であっても *bemerken* が間接的な知覚を表すと考えられる例は存在する。例えば既出の (11) で, dass 補文の内容は、「叫び疲れ」たこと, ないし疲れ・飽きを介して間接的に知覚されると考えられる。

他方で *bemerken* が記号を介しない直接的な知覚を表しうることは, 例えば *bemerken* がいわゆる感覚与件 (色, 音, 匂い, 味, 手触り) を表す名詞を対格目的語として伴う例によって示すことができる。例えば (19) では, 「大きな物音」が直接的な知覚対象であり, その知覚を媒介する記号は何ら存在し得ない。また既出の (12) でも, 「ドライバー」は直接の知覚対象と考えられる。²⁸

(19) Anwohner **bemerkten** gegen 1 Uhr laute Geräusche und sahen die Flammen aus dem Innenraum des Autos schlagen. (Braunschweiger Zeitung, 17.09.2011) 近隣住民は1時頃大きな物音に気づき, 車の内部から火が噴き出すのを見た。

²⁷ 検索式:「&bemerken /s0 an」, 検索日:2018年8月4日, ヒット数:2万2802件。その中から200例無作為抽出した結果コーパスで検索した結果。

²⁸ *bemerken* は, 「直接知覚の wie 文」と共起することが知られている。本稿の先述のコーパス調査でも例えば次のような例が確認できたが, merken と当該 wie 文との共起に関してさらなる観察が必要なので, このことを *bemerken* が直接的な知覚を表しうる根拠として挙げるのは控えておく。Sie war in einer Bäckerei und **bemerkte**, wie die Männer das Schloss knackten und mit ihrem Rad flüchteten. (Nordkurier, 09.09.2010)

なお、いわゆる感覚与件を伴う場合でなくても、*bemerken* が記号を介さない直接的な知覚を表すことが文脈上明瞭な例はある。次にトーマス・マンの『ベニスに死す』から1例を挙げる。

(20) Es war eine Gruppe halb und kaum Erwachsener, unter der Obhut einer Erzieherin oder Gesellschafterin um ein Rohrtischchen versammelt: Drei junge Mädchen, fünfzehn- bis siebzehnjährig, wie es schien, und ein langhaariger Knabe von vielleicht vierzehn Jahren. Mit Erstaunen **bemerkte** Aschenbach, daß der Knabe vollkommen schön war. (Thomas Mann: *Der Tod in Venedig und andere Erzählungen*, 60. Aufl., Frankfurt am Main: Fischer Verlag, 2004, S. 32) 「籐の小卓を囲んでいるのは、家庭教師かお相手役かとみえる婦人に監督された、子供と大人になりかけの子供のグループだった。十五から十七ぐらいまでの少女が三人、十四歳ぐらいかと思われる、髪を長くのばした少年がひとり。アッシェンバハは驚嘆しながら、この少年の完璧な美しさに気づいた。」(圓子修平 訳『ベニスに死す』, 集英社文庫, 2011, 46.)

(20) は、「アッシェンバハ」がホテルのロビーで人々を観察しているさなかの出来事であり、*bemerken*によって、記号を介さない直接的な知覚が表されていると言える。²⁹

本節をまとめると、*merken* と *bemerken* は、間接的な知覚を表す場合には、言い換えれば、間接的な知覚対象を対格目的語・補文として伴う場合には、相互に交換可能と考えられる。他方で、*bemerken* には、直接的な知覚を表す場合が、つまり直接的な知覚対象を表す対格目的語・補文を伴う場合があり、その場合は、*bemerken* と *merken* は相互に交換できない。³⁰

²⁹ 知覚動詞の補文としての *class* 文は、知覚の直接性に関して何も指定しない中立的な形式である。同様のことは英語の *that* 節にも当てはまることが知られている。例えば *Gisborne* (2010: 7f.) では、*I saw the flowers* は実際に、つまり直接に花を見たことを表すが、*I saw that the flowers had grown* は、花自体ではなく、例えば花の影しか見ていない場合でも成り立つ表現との指摘がある。

³⁰ *bemerken* と *merken* とで交換できる場合があるからといって、両語の差異および両語が分化していることは否定されない。*bemerken* は *merken* に対して、間接性に関して無標の表現であるという違いがあり、その点で両者は分化している。それは例えば、*Tier* と *Hund* で交換できる場合があるからといって、両語の差異および両語が分化していることが否定されないのと同じに思える。

3.2. 〈感じ取る〉 anmerken と anPP merken (anPP bemerken)

本節では、〈感じ取る〉という語義の anmerken が an ~ merken (および an ~ merken と交換可能な an ~ bemerken。以下逐一繰り返さない) と競合している可能性について論じる。まず結論を言うと、両者は、交換可能な場合があるとはいえ、常に交換可能なわけではなく、したがって厳密な意味で競合しているわけではない。

先述のように〈感じ取る〉という語義の anmerken は、an ~ merken からの前置詞抱合と考えられる。例えば、次に挙げる (20) のような anmerken の用例では、与格目的語は、dass 文で表される内容の「判断・認識の手がかり」を、本稿の呼び方では、補文の内容に気づくことを媒介する記号を表していることが明瞭である。

(20) »Das Hochziehen der Flaggen ist also gewährleistet, ja?«, fragt er dann, betont freundlich, und seiner Stimme ist nicht **anzumerken**, dass er seit heute Morgen um sieben eine Zensurenkonferenz hinter sich gebracht hat, [...] (Die Zeit (Online-Ausgabe), 07.02.2008) 彼はそれから「旗の掲揚は保証されているのだね?」と尋ねる。ことさら親切に。しかも彼の声からは、彼が朝7時からの検閲会議を済ませていることは感じ取れない。

しかしながら anmerken の与格目的語は、気づきを媒介する記号を表すというよりも、対格項の所有者、ないし補文で表される事態の所有者とむしろ解される場合の方が、頻度としては顕著に高い。先述の分析データ64例中では、56例がそうした事例と判断された (21) (22)。³¹

(21) Die nervliche Anspannung hat man beiden Teams schon vor dem Anpfiff **angemerkt** (Nordkurier, 17.02.2003) 神経の緊張が試合開始前から両チームに感じ取れた。

(22) Angela Merkel ist weder die Last des Amtes noch der Druck der Euro-Rettung wirklich **anzumerken** (Mannheimer Morgen, 06.07.2012) アンゲラ・メルケルには、職務の負担もユーロ救済の重圧も感じ取れない。

³¹ (20) のように気づきを媒介する記号を表すに留まるのは3例のみで、残りは判断のつかなかった例。

(21) では、与格目的語の「両チーム」は、「神経の緊張」に気づくのを媒介する記号というよりは、その所有者である。同様の解釈は、(22)にも、それから先述の(7)にも当てはまる。

他方で同様の解釈は an ~ merken には当てはまらない。例えば何度も言及している(4)でも、da の指示する「あるランキングでの1位という順位」は dass 文で表される事態の所有者ではなく、「判断・認識の手がかり」ないし記号である。同様のことは、先述の追加収集例12件すべてにおいて確認できる(23)(24)。つまり、an ~ merken は anmerken に包含されていることになる。

(23) Seit 20 Jahren schlüpft er in die Rollen des Weihnachtsmannes und des Nikolaus. Mit Glockengebimmel durchwandert er die Kremser Innenstadt, fragt Kinder, ob sie brav sind und was sie sich wünschen. „Dann **merke** ich **an** ihren Mienen, wie sie sich fühlen, spüre ihre Vorsicht, ihren Respekt.“ (Niederösterreichische Nachrichten, 10.12.2007) 20年来彼はサンタクロースに扮してきた。ベルをしきりに鳴らしながら彼は Kremser の中心部を練り歩き、子供たちに、いい子にしているか、何が欲しいか尋ねる。「すると私は彼らの表情によって、自身をどう感じているかに気づき、彼らの慎重さ、彼らの敬意を感じます。」

(24) Natürlich möchte er provozieren, das **merkt** man **an** seiner angriffslustigen Art, seinen Aussagen. (Spiegel-Online, 16.04.2016) もちろん彼は挑発したいのだ。そのことに、彼の攻撃的なありかた、彼の発言によって気づかされる。

3.3. 〈述べる〉 anmerken と bemerken

anmerken は、Paul (2002: 75) が指摘しているように、「口頭もしくは文書で、簡潔に補足すること、述べること (mündlich o. schriftlich knapp hinzufügen, bemerken)」を表すのに対し、当該語義の bemerken は、各種の辞書記述に鑑みるに、単に〈述べる〉という意味の中立的な表現と考えられる。

第1に、anmerken について、2.3.で言及した収集データを観察したところ、例えば次に挙げる(25)のような例が確認された。(25)では「多く手を加える時間が目下ない」という箇所に鑑みて、anmerken において「簡潔」に述べるのが問題であると言える。

(25) Ich hab gerade nicht so viel Zeit, viel daran zu arbeiten, aber ich

will dennoch zwei Sachen **anmerken** (Wikipedia, 2011) この点に関して多く手を加える時間が目下ありませんが、それでも2つだけ述べたいと思います

第2に, **bemerken** について2.5.で言及したデータを観察してみると, **bemerken** によって簡潔さが表されていると明言できる例は見られなかった。³² それゆえ, 当該の意味合いは **bemerken** において未指定なのではないか, という考えに導かれる。

まとめると, **anmerken** と **bemerken** は, 簡潔な補足が問題である場合でのみ交換可能である, というのが現時点での結論である。さらなる検証は今後の課題としたい。

3.4. 章末のまとめ

本章では, 語義の実現に際して競合関係にあるように見える語群に着目し, それぞれを比較・考察した。そこから導かれた結論をまとめたのが表2である。

語義	merken	anmerken	bemerken
気づく [直接性]	—	/	±
感じ取る	/	○	/
述べる [簡潔性]	/	+	±

表2: より具体的に見た, **merken** とその派生語における語義の分布 (一部). 「+」「-」「±」は [] 内の素性に関する情報. その他の記号は表1に準じる.

表2に説明を加えつつ, 本章のまとめとする。より具体的に見れば, 第1に, 〈気づく〉という語義の **merken** と **bemerken** は, 記号を介さない直接的な知覚を表しうるか, という点で弁別される。**merken** の対格目的語・補文は, **an** 前置詞句で表示され得る記号を介して間接的に知覚される対象を表す。それに対し **bemerken** は, 間接的な知覚対象のみならず直接的な知覚対象を表す対格目的語・補文も伴いうる。

第2に, 〈感じ取る〉という語義の **anmerken** が **an** ~ **merken** (および **an** ~ **merken** と交換可能な **an** ~ **bemerken**, 以下繰り返さない) と競合している可

³² *nebenbei bemerkt* 「ついでに言えば」という成句的な表現は確認できるものの, その場合は「ついでに」という意味合いは無論 *nebenbei* という副詞によって生じていることになる。

能性について検討した結果、否定的な結論に至った。確かに〈感じ取る〉という語義の *anmerken* は、その与格目的語が気づきを媒介する記号を指示すると解される稀な場合においては、*an ~ merken* と交換可能である。しかし、*anmerken* の与格目的語は、対格目的語の指示対象の所有者ないし補文の表す事態の所有者であることの方が普通で、その場合 *anmerken* は、*an ~ merken* と交換できない。

第3に、〈述べる〉という語義の *anmerken* と *bemerken* は、「簡潔さ」という点で弁別可能と考えられる。*anmerken* は簡潔に述べることを表すのに対し、*bemerken* は、簡潔かどうかに関して中立的・未指定であるとの結論に至った。

4. おわりに

本研究によって、*merken* をはじめとする当該語群でも、意味的に、あるいは使用域において、分化の見られることが示された(表1, 表2)。

分化の見られること自体は、これまでの研究からも予想されることではあるが、³³ 分化状況を実際に示したこと、それから、それを示す過程で従来よりもきめ細かい各語(義)の記述ができたこと、以上の2点が本稿の成果であると考えている。今後、他の同幹類義動詞群にも対象を広げられるとよい。

文献表

- 岩崎英二郎／小野寺和夫 (1969)：『ドイツ語不変化詞辞典』，白水社。
 国松孝二 他編 (1998)：『独和大辞典』，第2版，小学館。
 佐藤宙洋 (2018)：「接頭辞 *be-* の類推促進機能：*bemerken* を例に」，*DER KEIM* Nr. 41, 1-22。
 山田進 (2017)：『意味の探究』，くろしお出版。
 Bolinger, Dwight (1977)： *Meaning and Form*, London/New York: Longman.
 Cruse, Alan (2015)： *Meaning in Language: An Introduction to Semantics and Pragmatics*, 3. ed., Oxford University Press.
 Dewart, Robert B. (2015)： *The Semantics of German Verb Prefixes*, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

³³ 接頭辞派生の役割に関しては、Wegera/Waldenberger (2012: 253ff.)、形式上の差異には意味的な差異が想定されることに関しては、Bolinger (1977: 1ff.)、同義語の希少性に関しては Cruse (2015: 142f.) を参照した。

- Duden (2014) : *Die deutsche Sprache: Wörterbuch in drei Bänden*, Bd. 1-3, Berlin/Mannheim/Zürich: Dudenverlag.
- Duden 7 (2014) : *Das Herkunftswörterbuch: Etymologie der deutschen Sprache*, 5., neu bearbeitete Aufl., Berlin: Dudenverlag.
- Duden 8 (1964) : *Vergleichendes Synonymwörterbuch: Sinnverwandte Wörter und Wendungen*, Mannheim: Bibliographisches Institut / Duden Verlag.
- Eberhard, Johann August (1982 [1910]) : *Synonymisches Handwörterbuch der deutschen Sprache*, 17. Aufl., durchgängig umgearbeitet, vermehrt und verbessert von Otto Lyon, Tokyo: Sansyusya [Leipzig: Th. Grieben' s Verlag] .
- Fleischer, Wolfgang / Barz, Irmhild (2012) : *Wortbildung der deutschen Gegenwartssprache*, 4. Aufl., völlig neu bearbeitet von Irmhild Barz unter Mitarbeit von Marianne Schröder, Berlin: De Gruyter.
- Gisborne, Nikolas (2010) : *The Event Structure of Perception Verbs*, Oxford University Press.
- Harm, Volker (2000) : *Regularitäten des semantischen Wandels bei Wahrnehmungsverben des Deutschen*, Stuttgart: Franz Steiner Verlag.
- Jakobson, Roman (1965) : Suche nach dem Wesen der Sprache, in: Holenstein, Elmar (Hg.) (2017) : *Roman Jakobson: Semiotik: Ausgewählte Texte 1919-1982*, 3. Aufl., Frankfurt am Main: Suhrkamp, 77-98.
- Kühnhold, Ingeburg / Wellmann, Hans (1973) : *Deutsche Wortbildung, Typen und Tendenzen in der Gegenwartssprache, Erster Hauptteil: Das Verb*, Düsseldorf: Pädagogischer Verlag Schwann.
- Latzel, Sigbert (1995) : *Lernschwierigkeiten mit deutschen Synonymen*, Teil 1-2, Heidelberg: Julius Groos Verlag.
- Mater, Erich (1967) : *Deutsche Verben 2: Grundwörter und deren Zusammensetzungen*, Leipzig: VEB Bibliographisches Institut.
- Motsch, Wolfgang (2004) : *Deutsche Wortbildung in Grundzügen*, 2., überarbeitete Aufl., Berlin/New York: Walter de Gruyter.
- Paul, Hermann (2002) : *Deutsches Wörterbuch: Bedeutungsgeschichte und Aufbau unseres Wortschatzes*, 10., überarbeitete und erweiterte Aufl. von Helmut Henne, Heidrun Kämper und Georg Objartel,

Tübingen: Max Niemeyer Verlag.

Ryle, Gilbert (2009 [1949]) : *The Concept of Mind*, London/New York: Routledge.

Schlaefler, Michael (2009) : *Lexikologie und Lexikographie: Eine Einführung am Beispiel deutscher Wörterbücher*, 2., durchgesehene Aufl., Berlin: Erich Schmidt Verlag.

Wahrig (2011) : *Deutsches Wörterbuch*, 9. vollständig neu bearbeitete und aktualisierte Aufl., Gütersloh/München: Wissenmedia.

Wegera, Klaus-Peter / Waldenberger, Sandra (2012) : *Deutsch diachron: Eine Einführung in den Sprachwandel des Deutschen*, unter Mitarbeit von Ilka Lemke, Berlin: Erich Schmidt Verlag.